

博物館で何をみるか (続)

はじめに

前号 (『学習院大学史料館紀要』第一六号) で、博物館の役割や理念、また具体的な事例としてロンドンの大英博物館、タイの「死の鉄道博物館」などを紹介した。なお、ここで博物館と呼ぶが、主要には歴史博物館を中心に説明することをお許し願いたい。また博物館の展示の在り方については専門の研究者やアーキヴィストがこれまでさまざまな議論を行ってきた。私がここでは改めて付け加えることはささいなことかもしれない。しかし私の個人的体験を踏まえて、「博物館で何をみるか」を考えてみたい。まず、最初に博物館の役割について、いくつかの論考を参考に若干考察し、次にイギリスの戦争博物館とパリの軍事博物館を具体的事例として紹介して、その展示の理念、方法などを考えてみたい。

一. 歴史研究者の役割と博物館の役割

歴史研究者とは何かを定義づけることは難しい。歴史を研究する人がすべて歴史研究者と言える。しかしここでは狭義に歴史研究者を、大学（あるいはそれ以外の教育、研究機関を含む）で研究、教育を行って、関連の学会等で活躍している人たちとしておこう¹⁾。その人たちは、歴史についての研究と教育を職業として、それは学問の自由のもとに自己の責任でその成果を世に問うことになる。

湯沢 威

それに対して、博物館で働く専門職員はどのような人たちによって担われているのであろうか。学芸員の資格を持つ人たちであったり、大学や大学院で歴史研究の実績をあげた人たちであろう。実際に、歴史研究者と博物館の専門職員を区別することは難しい。

しかし、私は歴史研究者と博物館専門職員との間には大きな違いがあると思う。歴史研究者はみずからの問題意識に即して、あくまでも個人的な営為として研究が行われる。たとえ共同作業で研究を行っても、その研究成果は個人に帰属するものであり、その内容に対しても個人が責任をとることになる。研究の成果は、学会で報告されたり、学術雑誌に論文の形で公表され、あるいはマスコミで社会的に評価されることになる。大学の講義で学生にその研究成果が披露されることになるが、その場合には、閉ざされた組織の中での研究の開示ということになる。

それに対して、博物館の専門職員は、大学の歴史研究者と同じようにそれぞれの問題意識に基づいて調査、研究が行われ、その成果は学術的に公表されるが、さらに、大学の研究者と異なるのは、博物館専門職員の研究は、それが不特定多数を対象に、広く社会に還元されるという義務が付されている。すなわち、博物館は社会教育の一翼を担う組織として、社会に対して絶えず問題を問いかけ、資料の提供、展示、市民との交流を行う必要がある。大学の場合には、大学という閉ざされた組織の中で、各人の研究成果を学生に提示し、また学界にその研究成果を問うことで、その責任が果たされるが、博物館の場合には、開かれた社会そのものが対象であり、その教育の対象は不特定多数の市民である。思想や信条、宗教、国籍、年

年齢、性別など問わず、あらゆる人たちを教育の対象として想定しなくてはならない。しかも、歴史研究者の研究成果は、個人の責任に帰することになるが、博物館の場合には、その研究成果、言いかえれば社会的プレゼンスとして現れる展示物に対しては、組織としての責任が問われる。二一世紀の博物館の在り方について、さまざまな角度から検討した、リンダ・ケリーは「博物館は見学者がどのように考えるか、に対して影響を与え、挑戦し、時には変革をせまり、彼らが大きな問題に取り組み、またますますグローバル化する世界の中で、知的市民となるよう奮い立つように、貢献する機会を有する」とその役割を強調している。³⁾

博物館が公的機関であれば、その展示の視点、内容には公的性格を帯びることになり、その思想性が大きな社会的波紋を巻き起こすことがある。そのひとつの例としては、スミソニアン航空宇宙博物館で、広島に原爆を落とした航空機、エノラ・ゲイをめぐる問題であった。この展示が、原爆を投下した機体とともに、広島に原爆の惨状についても説明していることが、アメリカ退役軍人などから強い批判を浴びることになった。⁴⁾これが大きな社会問題となって、館長は辞任に追い込まれたという事例もある。第二次世界大戦が終わって半世紀以上も経過しているが、アジアの諸国では依然日本の戦争責任が問われている。日本の戦争責任を問う場として先鋭的に表われるのは、一つは教科書であり、もう一つは社会教育機関としての博物館であろう。二一世紀はアジアの世紀と言われ、アジアは世界中で政治的にも経済的にも大きな役割を果たさなければならなくなっている。しかしアジア諸国の間で、二〇世紀の歴史認識を共有化していかない限り、真のアジアの共同体的発展は難しいものと思われる。

二、「歴史の記憶」と「記憶の戦争」

このような歴史認識の問題はヨーロッパでも同じような形で存在している。とくに第一次、第二次世界大戦の渦中の国となったドイツとその他の国々との間での共通の歴史認識の形成は、現在進行中のEUの統合にとつ

ては不可欠なことである。⁵⁾この点をフランスにおける植民地主義の論争を参考にして、考察したい。丸岡高弘氏の「戦争の記憶と記憶の戦争」という論考は多くの示唆を与えるものである。フランスでは、「戦争の記憶」が「記憶の戦争」として、大きな政治問題となっていた。旧植民地からの移民に対して、フランス政府は国家主義的な「共同体主義」の構築のために、市民が共通の歴史認識を持つよう働きかけた。すなわち、フランス政府は、過去のフランスの植民地支配に対して、その正統性を法律の中に条文化し、学校において植民地主義の「肯定的役割」を教育させようとした。それに対して、著名な歴史家が、国家による歴史認識への介入として厳しく批判をした。

しかし歴史は歴史家の占有物ではなくて、学問的に確立された歴史的真実の上に、政治が歴史の一部を切り取って集団的記憶として、モニュメントを建設したり、博物館で展示したりすることは許されるのではないか、という議論を生み出すことになる。「国家が成立するためには機能的な統治機構が存在するだけではなく、集団的記憶も共有されなければならない」という。ここでの国家は時の政府や官僚の思惑ではなく、あくまでも社会や組織のまとまりを意味するものであり、市民がかかわる共同体と考えるべきであろう。公的性格をもつ博物館も、アカデミズムの個人の価値観、歴史観に基づいた歴史研究とは別に、学術的研究をベースに、主体性をもって社会にプレゼンスすることが出来ると言うことになる。しかし「ある意味で集団的記憶が共有される範囲はその内容の明確化と反比例するから、そうした試みは必ずしも記憶を均一化する役にたつとは限らない。むしろ記憶の対立、記憶の戦争を激化させる危険性さえある」と丸岡氏は指摘している。⁶⁾

そこで博物館の役割が重要な意味をもつ。博物館は、学術的研究に依拠しつつ、積極的な問題提起、それへの評価と具体的な展示の方法が求められる。いいかえれば、歴史のどの部分を切り取るか、それを具体的にどのようなわかりやすく展示するか、博物館の主体性が問われることになる。その意味で博物館は、「記憶の戦争」の戦場であり、またその担い手でもある。これは象牙の塔に籠った私的営為としての、アカデミズムの歴史研

究とは異なっており、より困難な課題にあえて挑戦しなければならないことを意味している。博物館にかかわる人たちの間でも、展示にあたって、「パランスのとれた中立的な立場」を堅持するのか、あるいは「積極的な問題提示を行って、市民に考えさせ、対話をする機会を作るべきである」か、という議論の間に迷いはあるようだ。しかし私は博物館には問題の設定、それへの学問的裏付けのある解釈、わかりやすい展示などを積極果敢に行うことが求められていると思う。

学問の自由が保障されるべきと同じように、博物館の自由も保障されるべきである。それは国や公共団体の傘下にある博物館であっても、政治や特定の団体の圧力に屈することなく、博物館の主体性のもとに厳密な学問的根拠に基づいた、積極的な問題提起や主張を社会に対して提起すべきであろう。その中身の評価は、政治や特定集団からではなく、市民からの厳しい批判によってなされる。展示の内容に対して、賛同する人もいるだろうし、反感を抱く人もいるだろう。しかしそれは多様な価値観を背景とした試行錯誤の積み重ねが必要であろう。したがって、博物館は展示にあたって、どのような視点で行うのか、とすることが鋭く問われなければならない。

戦争博物館で問題になっているのは、加害者なのか、被害者なのか、あるいは反戦平和の思想で行うのか、いろいろな立場があり得る。また、アジアでは日本の侵略をうけて、被害を受けた立場からの展示、またそれが自国の独立運動とどのように関わったか、の展示も可能であろう。植民地からの独立運動に関わった主体の違いによっても、そのとらえ方は異なるであろう。例えば、多民族国家のシンガポールという狭い国土の中における戦争博物館の多様さなどは、それぞれの展示の主体によって、歴史解釈の重点の置き方が異なってくるのではないだろうか。

ポーランドのアウシュヴィッツの強制収容所の博物館を訪れると、そこには人間の狂気の原点を見る思いに駆られるが、問題はなぜこのようなことが行われるに至ったか、である。政治的、社会経済的背景に加えて、ヒットラーのホロコーストを受け入れてしまった人々の意識の中には、古代ローマ時代以来のユダヤ人迫害の歴史、西洋社会の中にとけ込んだ根

強い反ユダヤ主義があった。ヒットラーに協力した多くのドイツ市民、一九三四年九月、ニュールンベルグの「意志の勝利」と題されたナチス・ドイツの大集会には数万人の人たちが集まった。そこに参加した人たちはどのような感慨をもっていたのであろうか、またそのような人たちの心の裏には戦後どのような禍根が残っていたのであろうか。ナチス時代にヨーロッパ各地に潜むユダヤ人の摘発に協力した人々、その輸送に関わった人、収容所で実際に働いていた人たち、ナチス以外にも何万にも及ぶ人たちがホロコーストに協力していた。戦後彼らの感情の推移はどのようなものであったのであろうか。また、このような社会状況を生み出した、政治思想の喧伝者、協力者、教育機関、マスコミなどの存在は大きい。したがって、ホロコーストを許容したヨーロッパの社会の問題も考えなくてはならない。しかも、そこには被害者や加害者の枠を超えて、また単なる反戦平和の思想ではとらえきれない、民族的、宗教的、文化的対立が奥底にある。現代の世界に横たわる大きな政治課題も、結局、民族や宗教の問題と結びつくものが多い。

我が国の戦争博物館の在り方について、国際的視点にたって、「本来、戦争博物館とは、戦争の悲惨さを学び伝えることによって平和を願い、二度と戦争を起こさないことを心に刻むための施設であろう。その意味においていかなる戦争博物館を作るかは、われわれ日本人の戦争責任感が問われる問題でもあるのである」と問いかけるとき、欧米的な視点で言えば、それぞれの視点にたった戦争博物館の存在が許される。問題は、それぞれの博物館の展示が、イデオロギーや偏見を排して、どこまで学術的研究を根拠とした歴史事実であるか、またその歴史認識や展示の方法がどこまで市民の支持を得られるか、ということが鍵となる。

パトリック・グリーンは、博物館が、争点となっている課題にどこまで取り組めるか、という問題を考察している。彼は現代の、議論の多い問題に対して、博物館の役割をいくつか提起している。一、現代的問題の理解に役に立つこと。二、博物館研究員あるいは提携機関から学術的な見解が提示されていること。三、博物館のコレクションがその理解を助けるため

の展示物あるいは情報を有していること。四、異なった見方があることを提示すること。五、教養的な広がりを示したものであること。六、既成の見解に挑戦していること。しかし、彼は次のような点で注意も喚起している。すなわち、博物館が、特定の集団の意見の代弁をしたり、ご機嫌取りをしたり、また狭量な見解に依拠して、新しい考えを主張したり、博物館の中の特定の人の信念を代弁したりしてはいけない、と釘をさしている。さらに、あまりに現代的な問題に対しては取り上げない方が賢明であるとも忠告する。なぜならば、直近の問題を取り扱おうとすると、そのような問題は新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネットなどが、すみやかに対処している可能性があるからであるという¹²⁾。

シャロン・マクドナルドは、「博物館は完全に社会、文化そして政治の一部である。したがって、そこは、われわれが、より広い、社会的、文化的そして政治的な戦いを見ることの出来る場でもある。しかしそれらは単なる場、あるいは戦場、地勢、地帯、空間ではない。博物館は、一般大衆が科学知識に挑戦し、科学や技術をつづける仲介の役割を果たして、人種、国家、進歩そして現代性について、文化的に信頼のおける説明を行うのである」と述べている。¹³⁾ここでは博物館の挑戦的な役割を定義している。博物館の立場を明確にして、そこからどのようなメッセージを発するかと言うことが重要であろう。

大切なのは、それぞれの博物館は主観的に問題を設定し、それを可能な限り客観的にトータルに説明することが必要である。とくに戦争博物館の場合に国際的な理解にどのようにして結びつけるかということであろう。いずれの国も戦争を好んで行うことはない。戦争には相手があり、国際的な背景がある。戦争博物館の使命は、戦争の残酷さ、愚かさを知らしめる教育の場であると同時に、それがなぜ起きたのかを、あるいは起こらざるを得なかったのか、を考える場とする必要がある。単に、それぞれの国が加害者や被害者の立場を強調するだけでは、国際理解は生まれない¹⁴⁾。

丸岡氏が、「歴史学にとって大事なことは厳密な方法による事実の確定であり、決して過去を『裁判』することではない」と主張されるように、

後世の人間が、歴史の結末を分かっている、その立場で過去の事実を断罪するべきではないであろう。それはあたかも受験生が試験問題の正解を知って、問題に取り組むようなものである。渦中の人たちの決断は、先が分らない中での苦渋の選択であつたろうが、その結末を知っている後世の人間が安易に過去の人たちの行為や判断を裁くべきではないであろう。もし、自分が同じ立場におかれ、判断を求められた場合に、別の選択肢があつたのか。あつたとすれば、それは何を根拠に主張すべきなのであろうか。重い問いかけにも、歴史家は答えなければならない。過去は断罪の対象としてではなく、人間の営為に対する反省と学習の対象とすべきものであろう。

三、イギリスの帝国戦争博物館 (Imperial War Museum)

ロンドンにあるこの帝国戦争博物館は一九二四年に開設された。この博物館は、現在では、ロンドン以外に、ケンブリッジにあるダックスフォード航空博物館、マンチェスターにある分館、さらに第二次世界大戦中に、当時の首相、チャーチルが戦争の指揮をとった地下指令室も戦争博物館の一部を構成している。

ここではロンドン南部のランベスにある帝国戦争博物館を中心に紹介しよう。この前史は一九一七年にさかのぼり、第一次世界大戦の記録を保存することを目的として設立された。国が総力を挙げて、対ドイツ戦争を行っているときに、このような博物館を設立したことは驚きである。この博物館の設立については二つの目的があつた。一つは、戦争の初期の段階から記録を保存すること、もう一つは一九一七年に戦時内閣の直面した特別の事情があつた。連立内閣の首相となつた自由党のロイド・ジョージは、アスキス内閣のあとを引き継いで、体制の引き締めを図る必要があつた¹⁵⁾。とくに一九一六年のソンムの戦い以降、国民の士気が低下し、それに対する対応策の一環として、建設長官 (First Commissioners of works) のアルフレッド・モンドが世論形成の重要性を認識し、国立戦争博物館の計画を提案した。彼はイギリスを代表する化学会社、ブラナー・モンド社の社長

であり、また自由党出身の代議士でもあった。ちなみに彼はユダヤ系の財界人であった。

イギリスが第一次世界大戦に総力で戦っているときに、このような博物館を設立し、戦争の記録を保存していかうとする姿勢は驚くべきことである。戦争そのものの事実経過、モノ、文書などの記録とともに、帝国の人々がそれにどのように関わり、貢献したかを残そうとするものである。背後には、これが正義の戦争であるという自負があるのかもしれない。一九二〇年に博物館と管理団体 (Board of Trustees) が設立され、一九二四年にクリスタル・パレスでオープンした。一九三六年にベスレム王立病院の跡地に移転して、現在にいたるまでランベスが本拠となっている。

一九三九年に第二次世界大戦が勃発すると、これもこの博物館の資料収集の対象とすることに決定した。さらに、遡って、一九一四年以来、イギリスおよびコモンウェルスの軍がかかわった軍事行動すべてを史料収集の対象とすることも決定された。イギリスおよびコモンウェルスの軍が関与した地域紛争なども対象となったことによりまさしく「帝国」の戦争博物館の様相を呈することになる。近代戦争および個人の戦争体験に関するあらゆる側面についての記録を収集し、展示することを目的とした。そこには当然、武器、弾薬や装備品など直接戦闘に関わるものから、戦争に関わる人々とくに銃後の人たちの生活に関する史料なども収集の対象となった。また、それらは敵味方の区別なく、また軍人、民間人の区別なく、さらに軍事的、政治的、社会的、文化的な側面からも、体系的、総合的な史料の収集が図られた。この博物館の教育目的は、戦争や紛争の原因究明、それらの経緯、そしてその帰結について説明することにある。実際に、博物館には、航空機、戦車、軍艦から軍服、バッジ、メダルなどを展示し、また広範囲な記録、絵画、ポスター、写真、フィルム、ビデオなどが収蔵されている。

一九七〇年代と八〇年代には、博物館の三つのブランチを作った。一つは、一九七六年にケンブリッジシャーのダックスフォード Duxford に空軍関連の展示博物館、一九七八年には、ベルファーストに海軍関連の展示博物館、そして三つ目には一九八四年にロンドンのホワイトホールに、戦

時内閣博物館の公開である。ここはチャールが実際に寝泊りをして、第二次世界大戦の指揮を執ったところである。これら三か所がトラスト委員会の責任のもとに管理されている。

さてこの博物館の展示の内容を逐一紹介するわけには行かないが、第二次世界大戦時の極東、および日本についての展示について若干見ておこう。「日本の拡張計画」では「一九三〇年代にアジア、太平洋において日本は帝国を築いた。一九四一年までに、その野望はアメリカとの関係を極端に悪化させた。日本の期待は、ヨーロッパにおける戦争によって、極度に高まった。イギリス、フランス、オランダというヨーロッパの主要な植民地帝国は、ドイツと戦うことになったため、極東への関与を弱体化せざるを得なかった」。日本の膨張路線がアメリカとの摩擦を強め、また連合国側が、ヨーロッパ戦線に力を傾注したため、アジアの植民地防衛が手薄となり、そこに日本が攻撃をかけてきた、という解釈をしている。

「アメリカの参戦」の項目では、「日本の戦争計画では、西洋諸国のアジアの拠点を打ち砕き、兵力の配備の優越性を背景に、平和交渉をすすめることを計画していた。この戦略で重要な役割を果たしたのは、ハワイ諸島、



イギリス帝国戦争博物館



泰緬鉄道のレールを中心に関連品の展示

真珠湾基地のアメリカ太平洋艦隊を先制攻撃することであった。一九四一年二月七日、爆弾搭載の航空機が停泊中の艦隊を攻撃した。戦艦、航空機、港湾施設に甚大な被害をもたらした。日本の損失は小さかったが、航空母艦を捕捉出来なかったことが、その後に重大な影響をもたらすことになった。真珠湾攻撃はアメリカに衝撃と怒りをもたらすことになった。ルーズベルト大統領はそれを議会で、屈辱をもって記憶に残る日、と表現し、二月八日に日本へ宣戦を布告した。三日のちに、ドイツとイタリアがアメリカに宣戦を布告した。日本の真珠湾攻撃の位置づけとその不十分さが指摘され、枢軸国が太平洋戦争に加わる決定的な契機として説明されている。

館内には、太平洋戦争時の旧日本軍の遺品が多数陳列しており、それらが所狭しと並べてある。おそらくここに並べきれない多数の戦利品も倉庫に眠っているのではないかと思われる。なお、泰緬鉄道のレールと枕木の一部が展示してあるのを見るにつけ、イギリスがいかにこの鉄道に対する拘りが強いかを改めて知らされる。ヒットラーのホロコーストについては、特別のコーナーを設けて、かなり詳しい説明がなされている。アウシュヴィッツ博物館で使用されているものと類似の写真、パネルが多数使用されており、かつ収容所の模型は、実際に当地を訪れなくても、リアルな臨場感を漂わせる構成となっている。

全体的に、この博物館では、その設立方針や史料収集の方針にあるように、イギリスの観点から、イギリスがかかわった戦争の記録を収集し、展示するという色彩が濃い。また、パネルの説明は簡単であり、なによりもモノやオリジナルな史料を展示することにより、入場者に問いかけ、自らそれぞれの出来ごとの意味を読み取ってほしい、という姿勢が窺える。第一次世界大戦の時のロンドンの空爆、第二次世界大戦中の銃後の生活など、あるいはドイツのナチズムに呼応して、イギリスにおいてもファシストを支持する運動が起こったことなども取り上げている。なお、第二次世界大戦以降の国際紛争についても展示しており、その中にはフォークランド紛争やイラク戦争なども含まれている。

四. フランスの戦争博物館 (l'Hôtel des Invalides)

パリにあるアンヴァリッドは、一六七〇年代にルイ一四世が傷病兵の病院として建設したものであるが、その後教会を追加し、さらに地下に墓所をもうけて、ナポレオンやその親族、フランスの著名な將軍の廟を置いている。現在、このアンヴァリッドの一角に戦争博物館が置かれている。広場には日本の幕末、一八六四年に四国艦隊による下関砲撃に参加したフランス軍が接収した長州藩の大砲も展示されている。

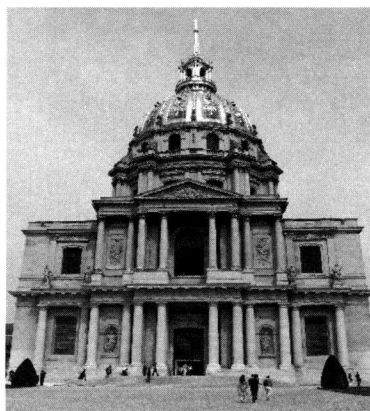
この博物館は、一九〇五年に、大砲博物館と軍事史博物館が合併されて成立したものである。大砲博物館は大革命後に起源があり、ナポレオン軍が使用した武器の収集などをおこなって、一八五二年に現在地にそれらコレクションが移された。その後、国立博物館、ルーヴル、ヴァンセンヌ大砲博物館やその他の個人のコレクションなどが加えられて、一八七一年にあらたに大砲博物館として開設した。それに対して、軍事史博物館は一八九六年に設立され、古代以来の武器、武具関連のコレクション、さらに小火器の収集が行われ、当時世界でも指折りの規模と内容を誇った。現在、館内には古代の武器、武具、ルイ一四世時代のコレクション、一九世紀の武器、軍服に加えて徽章、軍旗など衣類、装身具、さらに多数の絵画、写真、ポスターなどが展示されている。これらの展示物から、一七世紀以来の兵器の発達史をたどることが出来る。近代兵器がどのようなプロセスで大量虐殺兵器に至るのか、近代技術の発達とともにその精度が高まっていく様子がわかる。

二〇〇〇年六月にあらたに第二次世界大戦に関する展示が二〇〇〇平米の面積を使って開始された。この中には、第二次世界大戦に関する膨大な資料が含まれ、とくにレジスタンスの蜂起、フランス軍の再生、ノルマンディー上陸などとともに、ヴィシー政府についての展示も行われている。なかでもフランスの危機を救ったド・ゴール將軍には特別にスポットライトが当てられている。ロシア、アフリカ、アジアの戦況についても説明がなされ、ドイツ帝国の崩壊および日本の降伏、ドイツの強制収容所につい

ての展示も行われている。

第二次世界大戦に至るアジアの状況と日本の台頭について簡単に見ておこう。「ヨーロッパと世界」のパネルでは、「二〇世紀の初めに―植民地帝国を通して―全体的に地球を支配するようになったのが、まさにヨーロッパである。ロシア帝国は、アジアの北に沿って拡大し、太平洋にまで達し、中央アジアとコーカサスの奥深くにまで、侵入した。その間、イギリスとフランスがアフリカのほとんどの地域を保有する。アジアでは、インドがイギリスの、そしてインドシナはフランスのものとなる。ヨーロッパ諸国はそれぞれ競い合っていたにも関わらず、一九〇〇年に中国で起きた義和団の乱のような騒動の時には、相互に協力することも出来たのである」。帝国主義の世界史的視点が紹介され、ロシアの脅威、列強が協力して中国侵略を行った事実が説明されている。

「しかしながら、ヨーロッパがなんでも思い通りに出来たわけではなかった。アメリカは世界最大の工業国家になっていたし、そのルーツがヨーロッパにあるとは言え、一九世紀の初期から、自らの影響力のおよぶ範囲を「モンロー主義として」宣言していた。多くのイギリスの領土は、自治領（ドミニオン）として、独立し始めていた。カナダ、オーストラリア、ニュー



アンヴァリッド正門

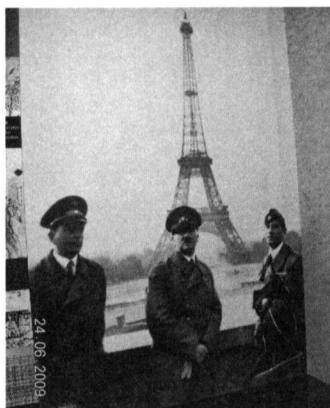


19世紀の展示の模様

ジーランド、ボア戦争後は南アフリカまでもが独立した。アジアでは一つの国が興隆しつつあった。それは日本である。日本は主要なヨーロッパの大国、ロシアを、満州における日露戦争（一九〇四―一九〇五）で破った。ヨーロッパで戦争が勃発したとき、世界はすでに変化しつつあった。ヨーロッパの帝国主義諸国に対して、アメリカが独自の動きをしていたこと、日本のロシアとの戦争が淡々と説明されている。

「アメリカの参戦、真珠湾からミッドウェイまで」のパネルでは、「アメリカにおける日本人の資産の凍結に至る数カ月の緊張関係の後、とくに石油輸出禁止の後に、日本は戦争に突入することを決定した」。「一九四一年二月七日、急襲によって、真珠湾および太平洋艦隊が日本人によって攻撃された」。日本の真珠湾攻撃の前に、アメリカの日本への厳しい外交圧力が前提として説明されている。「ドイツとイタリアが、アメリカへの宣戦布告を二月一日に行った」。「日本はまもなくマレーシア、シンガポール、インドネシア、ビルマ、アリアナ諸島、ソロモン諸島、フィリピン、そしてニューギニアを支配下に置いた。これらの勝利によって、日本は戦略的な原材料、とくに石油、スズとゴム、を完全に支配することが出来た」。「アメリカは、全面的な経済的、産業的、精神的動員に支えられて、その復讐を実行に移すまでに六ヶ月を要した。一九四一年六月五日、ミッドウェイでの日本の艦隊に対する大勝利が、太平洋戦争のターニングポイントとなった」。

二〇世紀に入ってからの世界の列強の動き、植民地主義の中で、極東における日本の台頭、一方ではアメリカでの対日制裁の動きを説明するとともに、他方では真珠湾攻撃に至る経緯が説明されている。このような視点では、イギリスの帝国戦争博物館にはなかったものである。ここでは、単にフランスが関与した事件だけではなく、世界的な視点で説明がなされている。このような展示には、博物館側の思想性が現れる可能性があるが、私の見た感想としては、きわめて冷静、客観的に歴史事実を淡々と説明しているように思われる。ヒットラーについては、当然彼が行ったホロコーストなどの事実を取り上げるとともに、他方では、おそらくフランス人に



エッフェル塔を背景としたヒットラー



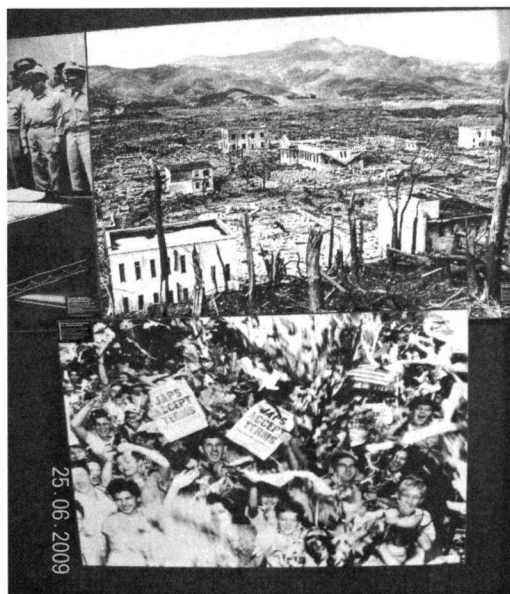
第2次大戦の日米の兵士の人形

とっては感情的には抵抗があると思われる、エッフェル塔を背景にした大きなヒットラーの写真を掲示している。この写真はほかでもよく見かけるが、これほど大きく拡大した写真を見るのは初めてである。パリの象徴であるエッフェル塔を背景にした、ヒットラーの写真をこれほど大きく展示する理由は何であろうか。歴史から抹殺すべき忌まわしい人物として葬りさるというよりも、あくまでも歴史的事実を提示しようとするものである。彼の存在は大きかった。この博物館の姿勢が見て取れるような気がした。真珠湾攻撃に始まる日米開戦についても主要な局面が実物をもって説明されている。これはフランスサイドの歴史観ということになるだろうが、日米兵士がそれぞれ軍服を着て並んで展示されていたり、真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争は広島、長崎の原爆によって終わることが、キノコ雲の大きな写真によって提示されている。アメリカであれば真珠湾攻撃に力点が置かれて、原爆についての説明は小さくなるかもしれない。あるいは日本では逆のことが描かれるかもしれない。しかし、このアンヴァリッド博物館では、真珠湾攻撃から、原爆までが客観的に展示されているように思えた。また、原爆投下後の惨状の写真の下には、日本が無条件降伏を受け入れて喜ぶアメリカ人の写真が掲げられている。いずれも歴史の現実である。

おわりに

この二つの博物館を比較した場合、パリの軍事博物館の方が、規模的にも内容的にもロンドンの軍事博物館を凌駕しているように思える。またその展示方法にも、パリの軍事博物館は、フランス人の視点というよりも、よりグローバルな観点で歴史を説明しているように思われる。ロンドンの軍事博物館はイギリス帝国を軸にした歴史の見方であり、説明よりも、モノの展示が中心と言う印象を持ったが、それはそれで博物館の展示の一つのあり方としては理解できるであろう。

戦争博物館を見て感じたことは、まず第一に、過去の歴史的事実を直視するということである。第一次世界大戦にせよ、第二次世界大戦にせよ、実際に何が起こったのかを事実をもって明らかにすることが重要である。それはモノで展示する場合もあるだろうし、写真やパネルで説明することもあるであろう。言うまでもなく、いずれも学術的な裏付けが必要である。第二に、戦争という悲惨な出来事が二度と起こらないための人類の反省の場として活用することである。そこには冷徹な歴史観が要求される。そし



上：原爆投下の写真

下：日本の無条件降伏を喜ぶアメリカ人

て第三には、結果や悲惨さだけを訴えるだけではなく、そのプロセスについての説明も重要である。なぜそのような事件が起こったかを客観的冷静に分析する必要がある。当時の政治家、マスコミ、学者、一般大衆が戦争やホロコーストを容認してしまった背景には何があったのか、それぞれの博物館の主張や解釈がありうるであろう。しかし、すでに指摘したように、後世の人間が過去の出来事を断罪はできないということである。過去の出来事を厳粛に受け止め、政治や宗教やイデオロギー、偏見などから峻別した、厳密な学問的な議論が行われなければならない。歴史研究における学問的アプローチとは何か。それは原史料や歴史遺物に基づいた、精密な客観的な分析である。そこに歴史研究の質が問われることになる。とくにそれが国際的な問題を対象とした場合には、どちらの国の視点がより抱括的、客観的か、それぞれの国の歴史研究の質が問われることになる。

後世の人間が過去の人たちの行為を研究する視点はどのような形で存在するのであろうか。当時の環境の中で苦渋の選択を迫られた人たちと同じ目線で抱える必要があるであろう。博物館の役割は、第一級の資料を発掘し、それをわかりやすく説明して、それが持つ歴史の意味は観覧者それぞれが解釈し、結論を導き出すものであろう。名演奏を聴いて、それをどのように受け止めるかは、聴衆一人一人のこのころの問題である。これは言いかえれば、博物館は、ちょうど音楽会場の場であり、展示物は、オーケストラそのものであり、またその演奏に相当するものであろう。しかしそれをどのように受け止め、感動するかは聴衆の問題である。博物館は、問題設定を現代人の視点で行い、しかしその展示の資料や展示の方法は当時の人たちの目線で行い、それは厳密な学問的分析に裏付けられたものでなければならない。場合によっては、博物館は過激な問題提起も許されるかもしれない。しかし博物館が現代人の感覚で自分たちの感情やイデオロギーの注入の場となつてはならないことは言うまでもない。

博物館はさきにも触れたように不特定多数の人を対象とした社会教育の場である。そしてそれが戦争博物館や軍事博物館のような場合に、過去の国と国との対立抗争をどのような形で理解するのか、国際理解にとって極

めて重要である。そのためには、国を超えて共通の歴史認識を形成することが必要であるが、立場を異にしてどこまで客観的に冷静な歴史認識を共有することが出来るか。それぞれの国の政治、社会、文化の成熟の度合い、言いかえれば市民社会の成熟度と関係するように思われる。すなわち、市民社会の成熟度とは、価値感の多様性を容認し、かつ過去の歴史事実を冷静に認めあう客観的態度が市民の中で共有されているか否かにかかわっている。すでにヨーロッパではいろいろな試みの中で一定の水準を生み出しているように思われる。それがアンヴァリッドの展示の中に見ることが出来る。

しかし、市民社会が成熟段階に達していないときに、戦争博物館を国際理解のためにどのように利用するべきであろうか。戦争を対象にした博物館であれば、加害者と被害者では見方が異なってくる可能性がある。問題は、訪問者がどちらの立場の博物館であれ、冷静に寛容さをもって見学し、みずから突き付けられた問題として考え、歴史共通認識の方向は何かをそれぞれが模索することであろう。成熟した市民社会の形成にむけて辛抱強い試行錯誤が必要である。博物館はそれぞれ主体性をもち、社会に積極的に訴える義務をもつとともに、国際的な問題にかかわる場合に、博物館がその国際理解を進める大きな役割を果しうることである。戦争博物館は「記憶の戦争」を克服する場として極めて重要であり、国、民族、文化、宗教などを超えた共通の歴史認識形成の場となりうる。

注

(1) もちろん、在野で独自に優れた歴史研究をしている歴史家が多いことは知っているが、その人たちの多くは、それを生業とはしていない、あるいは教育と直結していない、という意味で、ここでは職業人としての歴史研究者とは区別しておきたい。在野の歴史家で、出版物や講演で生計を立てている人は例外中の例外であろう。

(2) 博物館の職員が、博物館という組織を離れて、個人の研究者として自己の研究成果を公表することはありうるであろうし、その場合に

はその責任はあくまでもその個人に帰するということになる。ただ、このような事例は、ここでは議論の対象外とした。

- (3) Lynda Kelly, 'Measuring the impact on their communities: The role of the 21th Century Museum', (<http://www.intercommuseum/documents/1-2Kelly.pdf>).

- (4) 詳しくは、Thomas F. Gieryn, 'Balancing act: science, Enola Gay and history Wars at the Smithsonian', in *The Politics of Display, Museums, science culture*, edited by Sharon Macdonald, 1998, および荒井信一／早乙女勝元監修『世界の「戦争と平和」博物館』第四巻（一九九七年）一八九頁参照。

- (5) 船橋洋二『歴史和解の旅―対立の過去から共生の未来へ』（朝日新聞社、二〇〇四年）三二九～三三三頁。ペーター・ライヒェル（小川保博・芝野田和訳）『ドイツ 過去の克服―ナチ独裁に対する一九四五年以降の政治的・法的取り組み』（八朔社、二〇〇六年）第八・九章参照。
- (6) 丸岡高弘『戦争の記憶と記憶の戦争―フランスにおける植民地主義の評価をめぐる論争』（『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第二三号）。

- (7) 注（6）丸岡前掲書、九七頁。ここから筆者は、記憶の戦争を論じるための、記憶の政治学の必要性を訴えている。

- (8) 荒井信一編『戦争博物館』岩波ブックレットNo.338。なお、第二次世界大戦の時に、シンガポール博物館の資料を保存し尽力した徳川義親と田中館秀三の名前は、国際的にも知られている。（J. hn. M. Mackenzie, *Museums and Empire*, Manchester University Press, 2009, p.258）

- (9) 現在、この集合が行われた場所は、Reichsparteitagsgelaende Kongresshalleとして、博物館として公開されている。なお、ダニエル・J・ゴールドハーゲン（望田幸男監訳）『普通のドイツ人とホロコースト』（シネルヴァ書房、二〇〇七年）

- (10) 注（8）荒井信一編前掲書、三三三頁。

- (11) Patrick Greene, 'Content and Contention: can museums present controversial issues?', AMOL(Australian Museums of Galleries),

2006, p. 9

- (12) *Ibid.*10。なお、私が見たオーストラリアの博物館では、多民族社会であるために、移民やとくに先住民であるアボリジニに配慮した展示が目をついた。シドニーの国立博物館にはオーストラリアの国旗と並んで、原住民アボリジニの民族の旗が掲揚されていたのが印象深い。

- (13) Sharon Macdonald (ed.) *The Politics of Display, Museums, science culture*, Routledge, 1998, p. 19

- (14) 荒井信一『歴史和解は可能か』（岩波書店、二〇〇六年）終章。早瀬晋三『戦争の記憶を歩く、東南アジアのいま』（岩波書店、二〇〇七年）二一〇頁。

- (15) 注（5）丸岡高弘前掲書、八八頁。

- (16) この博物館の設立事情について、荒井信一氏は、第一次世界大戦に入つて、経費節約のため、一九一六年三月、すべての国立の博物館や美術館が閉鎖されたが、そのような中で、一九一七年のロシア革命などにより、厭戦気分が広がりをおそれ、政府が国民を総力戦に動員する政策の一環として、戦争博物館を設立した、とその背景を説明しているが、ロシア革命がこの博物館設立の動機にどこまで影響を当てていたかは不明である。（荒井信一・早乙女勝元監修『世界の「戦争と平和」博物館』第二巻、一九九七年、pp. 184-185）Gaynor Kavanagh, 'The Origin of the Imperial War Museum', *Journal of Contemporary History*, vol.23, No.1 (Jan.1988), pp. 79-80
- (17) 一〇五頁下段の写真。なお、このレールの上を走った機関車が、靖国神社の中にある遊就館の入り口ロビーに展示してある。



オーストラリア博物館（シドニー）の屋上の国旗とアボリジニの旗